A Legend of Fujiwara Sanekata and Northeast Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-01-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野崎, 準 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24130

藤原実方の伝説――「みちのく」から帰還した歌人の魂――

野崎　準

一．はじめに
二．歌人実方にまつわる伝説
三．後世の脚色と伝説の地
四．「歌人の魂」の帰京伝説
五．おわりに

一．はじめに

平安時代中期の歌人で、奔放な愛の歌で知られた左近衛中将藤原実方（?～長徳四・九九八年）は陸奥守在任中現地で急死したと言われ、勅撰集に六七首の和歌を残し、死後編纂されたと思われる『実方集』（註一）を残す。小倉百人一首にも選ばれ、中古歌仙三十六人にも名を連ねており、平安時代の人物志には普通に取り上げられている（註二）。

歌人実方の代表的な一首をあげればやはり百人一首にひかれた『後拾遺集』の

かくとだにえやは伊吹のさしも草
　　さしも知らじな燃ゆる思ひを

であろうか。「伊吹」は上野国の山とも、美濃・近江の境の伊吹山ともいい、「さしも草」は灸治に用いるモグサで、人知れず燃える思いを示している。この歌のためではないであろうが、滋賀県伊吹山は灸治用モグサの名産地でもあった。

日本では古来優れた歌人を追悼し賞賛する風潮があり、名歌人となると死後もさまざまな周辺のエピソードが語られ、時として史実とは異なる伝承も付け加えられる。柿本人麻呂、在原業平、藤原定家、西行など枚挙に暇がないが、藤原実方についても同様で、没後まもなく物語に登場、その後もそれに脚色が付け加えられて行く。この「実方中将伝説」には「みちのく」が深く関わっており、しかも都では東北とは異なる形の言い伝えがあった。そこで乏しい資料からこの歌人の伝承を集め纏めて見た。

（註一）『実方集』岩波新日本古典文学大系 二八　平安私家集　岩波書店

一九八四

正しくは「實方」であるが本稿では実方と表記する。

（註二）「藤原実方」角田文衛編『平安時代史事典』角川書店　平成六年

二．歌人実方にまつわる伝説

藤原実方は、生年は不明だが侍従藤原定時（貞時とも）の子で、天延元年（九七三）叙爵、以後右兵衛権佐、左近少将、右馬頭、左近中将などの武官を歴任し長徳元年（九九五）陸奥守に任じられ正四位下に昇叙。同五年（九九八）陸奥国に卒す、という伝記が『平安時代史事典』（註二文献）等にある。この陸奥守赴任は別に後述の物語の伝えるような左遷人事ではなかったとされているが、まだ若い（四十歳前後とする説もある）情熱の歌人が歌枕の名所陸奥国に国司として赴任、帰京はならず現地で死去、というのは同時代や死後の人々に様々な同情と憶測を生んだようである。

先ず鎌倉時代初期に源顕兼の著した『古事談』（註三）の第二・臣節の章に始めは藤原行成の逸話として

一條院御時。実方【（傍注）小一條左大臣師尹孫、侍従貞時子、母左大臣雅経女】與行成【（傍注）一條摂政伊尹義孝孫。少将男謙徳公為子、母大納言保光卿女】於殿上口論之間。実方取行成之冠。投弃小庭退散云々。

行成無繆気。静喚主殿司。取寄冠。擺砂着之云。左道ニイマスル公達哉云々。

主上自小蔀御覧ジテ。行成ハ召使フヘキ者也ケリトテ被補蔵人頭【（傍注）干時備前介前兵衛佐也】実方ヲバ歌枕見テマヰレトテ被任陸奥守云々。（以下略）

少し離れて実方の物語があり、

実方経廻奥州之間。為見歌枕。毎日出向。或日アコヤノ松ミニトテ欲出之處。国人申云。アコヤノ松ト申所此国中ニハ候ハ子ト申ノ時。老翁一人進出テ申云。君ハイヅベキ月ノイデヤラヌカナ【（此歌ミチノクノアコヤノ松ニコガクレテ）】ト申ス古歌ヲ思召テ被仰下候歟。然バ件歌ハ出羽陸奥未堺之時　所読之歌也。被堺両国之跡者。件松出羽国方ニ罷成候也ト申ケリ。

又後国依無菖蒲。五月五日水草ハ同故トテカツミヲ被葺ケリ。其後国習今如斯。

実方中将怨不補蔵人頭。雀ニ成テ居殿上小台盤　云々。

と書かれている。

この話は有名になり、鎌倉時代中期の編纂という『十訓抄』にも「行成為実方被打落冠」として（註三文献）

大納言行成卿いまだ殿上人にておはしける時、実方中将いかなる憤やありけん、殿上に参會ていう事もなく行成の冠を打落て小庭になげ捨ててけり。行成少しもさはがずして、とのもり司をめ

して、冠取て参れとて、冠して守刀よりかうがいぬき取りて、びんかひつくろひて居直りて、いかなる事にて候やらん、忽にかうほどの乱冠に預るべき事こそ覚侍ね、その故を承りて後の事にや侍るべからんとことうるはしくいわれけり。実方はしらけてにげにけり。折しも半蔀より主上御覧じて、行成はいみじき者也かくおとなしき心あらんこと思はざりしか、とてそのおり蔵人頭あきたりけるけるに多くの人を超てなされにけり。実方をば中将を召して歌枕見て参れとて陸奥国の守になしてぞつかはさりける。やがてかしこにて失にけり。

実方蔵人頭になられでやみにけるを恨にて、執とどまりて雀に成て殿上の小台盤に居て台盤をくひけるよし、人言ひにけり。

一人は不忍によりて前途を失ひ一人は忍を信じるによりて褒美にあへるたとへなり。

とある。又鎌倉時代も後期に書かれた吉田兼好『徒然草』には実方を在原業平と並ぶ歌人とし、二人を祀る社が上賀茂神社にあるとする（註四）。

第六十七段

賀茂の岩本・橋本は、業平・実方なり。人の常に言ひまがへ侍れば、一年参りたりしに、老いたる宮司の過ぎしを呼び止めて、尋ね侍りしに、「実方は、御手洗に影の映りける所と侍れば、『橋本や、なほ水の近ければ』と覚え侍る。吉水和尚の

月をめで花を眺めしいにしへの　やさしき人はここにありはらと詠み給ひけるは、岩本の社とこそ承り置き侍れど、己らよりは、なかなか御存知などもこそさふらはめ」と、いとうやうやしく言ひたりしこそ、いみじく覚えしか。

今出川院近衛とて集どもにあまた入りたる人は、若かりける時、常に百首の歌を詠みて、かの二つの社の御前の水にて書きて手向けられけれは、誠にやん事なき誉ありて、人の口にある歌多し。作文・詩序など、いみじく書く人なり。

と、実方・業平が上賀茂神社末社の岩本・橋本の両社に祀られているとしている。なお吉水和尚とは慈円、今出川院近衛は歌人、中納言藤原伊平の女、という。『徒然草』は江戸時代には何度も版行され、多くの人に読まれたためか後世の反響も多い。

阿古屋の松が陸奥国から出羽国に変わったのを知る話は『平家物語』巻二の「阿古屋の松のこと」に日本六十六国は三十三カ国の分割による物、とし実方が阿古屋の松を探す話を国境変更の例として引用している。同じ話題が、これは鎌倉時代を過ぎ完成は室町時代という『源平盛衰記』にもある。巻第七の「日本国広狭の事」であるが、本書の方が更に詳しいので引用する（註五）。

一条院の御宇、大納言行成の末の殿上人にて御座しける時参内の折節実方中将も参會して小台盤所に着座したりけるが日此の意

趣をば知らず実方笏を取直していふ事もなく行成の冠を打落として小庭に抛捨てたりければもとどりあらはになしてけり。殿上階下目を驚かしてなにと云ふ報あらんと思けるに行成騒がず閑々と主殿司を召して冠を取寄せかうがい抜出して髪掻直し冠打ちきて殊に袖掻合はせ実方を敬して云ひけるはいかなる事にか侍らん忽にかほどの乱罰に預るべき意趣覚えす、且は大内の仕出なり且は傍若無人なり、その故を承て報答後の事にや侍るべからんと事うるさくいはれければ実方しらけて立にけり。主上折節櫺子の隙より叡覧あって行成は勇々しき穏便の者也とて即ち蔵人頭になされ次第の昇進とどこほりなし。実方中将を召して歌枕注して進らせよとて東の奥へぞ流されける。実方三年の間名所名所を注しけるに阿古屋の松ぞなかりける。正しく陸奥国にこそ有りと聞きしかとて此れ彼れ男女に尋ね問ひけれ共教る人もなく知りたる者もなかりけり、尋ね侘びてやすらひ行きける程に一人の老翁にあへり。実方を見て云けるは、御辺は思ひする人にこそ御座れ何事をか嘆き給ふと問ふ。あこやの松を尋ね兼たりと答へければ老翁聞きて最情（いとなさけ）そ侍る。是やこの

　みちのくのあこやの松の木高きに　出づべき月の出やらぬ哉

といふ事侍り此事を思出つつ都より遙々と尋ね下り給へるにやといへば実方さにこそと云ふ。翁の曰く陸奥出羽一国にて候ひし時こそ陸奥国とは申したれ共両国に分れて後は出羽に侍るなり。彼国に御座して尋ね給へと申しければ即出羽に越へて阿古屋の松をも見たりけり。彼の老翁と云ひけるは鹽竈大明神とぞ聞えし。加様に名所をば注して進らせたれ共勅免はなかりける。

大分脚色が入っているが概要は『古事談』の引き写しである。ところがこの章に続いて

笠島道祖神の事

　終（つひ）に奥州名取郡笠島の道祖神に蹴殺されにけり。実方馬に乗りながら彼道祖神の前を通らんとしけるに人諫めて云ひけるは此神は効験無双の霊神、賞罰分明なり、下馬して再拝して過ぎ給へと云ふ。実方問て云ふ何なる神ぞと。答へけるはこれは都の賀茂の河原の西一條の北の辺におはする出雲路の道祖神の女なりけるをいつかかしづきてよき夫に合せんとしけるを、商人に嫁ぎて親に勘当せられて此国へ追下され給へりけるを国人これを敬ひて神事再拝す。上下男女所願ある時は隠相を造りて神前に懸飾り奉て是を祈り申すに叶はずと云事なし。我が御身も都の人なればさこそ上り度ましますらめ。敬神再拝して祈り申して故郷に還上り給へかし、と云ければ実方、さては此神下品の女神にや、我下馬に及ばずとて馬を打ちて通りけるに神明怒を成して馬をも主をも罰し殺し給ひけり。其墓彼社の傍に今に是有りといへり。人臣に列して人に礼を致さざれば流罪せられ神道を欺いて神に拝を成さざれば横死にあへり。実に奢る人なりけり。され共都を恋しと思ひければ雀と云小鳥になりて常に殿上の台盤に居り台飯を食ひけるこそ最哀れなれ。

という実方の最後を記している。

阿古屋の松と実方の話は能『阿古屋松』でも引用される。世阿弥の作ながら長く上演されず、東日本大震災の復興を願って近年演じられ話題になった。実方の前で老翁が鹽竈大明神として現れ舞う物語である。

藤原行成に実方が遺恨をもった原因は、これも作者を西行としているが実際は後世の説話集という『撰集抄』巻八（註六）に

中務元輔、実方、兼方、忠岑歌の事

（前略）昔殿上のおのこども。花みんとて東山におはしたりけるに。俄に無心雨降て人々実騒給へりけるに実方中将いとさはがず木の本立寄りて

桜がり雨は降きぬ同じくは　ぬるとも花の陰に宿らん

と読て。かくれ給はざりければ。花よりもりくる雨にさながらぬれて装束しぼりかね侍。此を興あることに人々思ひあはれけり。又の日斎信の大納言。主上にかかる面白事の侍しと被奏に。行成其時蔵人頭におはしけるが。歌は面白し。実方はおこなりと。の給てけり。

此詞を実方もれ聞給（ひ）て。深（く）恨をふくみ給ひしとそ聞侍る。（後略）

実方はなお『今昔物語』（註七）にも藤原宣方との別れの歌の贈答（巻二四の三七）、および陸奥守として初期武士団の頭である「余五と澤又」の争いの物語の冒頭にも脇役で登場する（巻二五の五）、実方在任中の東北地方は平安であり、武官歴任の実方は初期武士団にも睨みが効いたのであろうか。

（註三）源顕兼『古事談』、編者不明『十訓抄』新訂増補国史大系一八　吉川弘文館　平成一二年
（註四）吉田兼好・西尾実校注『徒然草』岩波書店　一九八一年
（註五）『校訂源平盛衰記』博文館　明治二六年
（註六）編者不明『撰集抄』続群書類従　第三十二輯　昭和五六年
（註七）『今昔物語　本朝』新訂増補国史大系一七　吉川弘文館　平成一一年

三．後世の脚色と伝説の地

藤原実方はこのような伝説の人となった。それは中世を経て近世になるとなお人気のある歌人として語り継がれた。都でもゆかりの地が顕彰され、さらに熱意のあまり「弁慶の腰掛け石」「牛若丸太刀洗いの池」のごとき捏造観光名所も作られたようである。本格的な京都の名所案内の始まりという『都名所図絵』（註八）には、

巻の二　平安城尾

【更雀寺】は三条通大宮の西にあり。浄土宗にて本尊阿弥陀仏

は真日の作なり。中将実方朝臣勅をうけて歌枕の為に吾妻に赴き陸奥において卒す。其の霊雀となりてこの寺の森に棲むと住主観智法印の夢に見ゆる。故に雀森とも称す。この地もとは大内裏の勧学院の地なりとも云ふ。実方塔、寺内にあり。

『山州名跡志』（註九）にはもう少し詳しく

○森豊山更雀寺　在四条通大宮西

（中略）古此地ニ大樹アリ、諸鳥群舎ス。一時当寺住主観知法印アリ。其夢中ニ雀来テ告テ云。吾ハ是一条帝ノ侍臣中将実方也。於陸奥卒ストイヘトモ、想帰洛、鬱意妄執ノ故ニ飛鳥トナッテ帰来ス。先程ノ余縁ヲ以テ当寺ノ森ニ遊ブ。師為吾斎戒シテ抜苦破罪ノ為祈念、仏寺ヲ勤修セバ苦輪ヲ脱（まぬが）レナント云々。

とあり、この後寺号を更雀寺としたというが、ここは勧学院の跡地で、「勧学院ノ雀ハ不学ニテ蒙求ヲ囀ル」の諺が寺名の起源だろうとしている。

又『山城名跡巡行志』（註一〇）にも

【更雀寺】浄土宗西山派

……中将実方ノ霊雀ニ成リテ当寺ノ杜ニ遊テ住主観智ニ告テ

【図版一】現在の更雀寺
京都市左京区静原、雀塚

【図版二】更雀寺雀塚正面

追善ヲ請フ、因テ名トス。此寺墓内ニ実方朝臣ノ塔アリ。（原漢文）

と記されるなど多くの名所案内にあり、ここに雀が居ついたのは勧学院の森だったからとする説もある。

右京区四条通大宮西の市街地にあったこの寺は昭和五〇年代に左京区静原に移転した。叡山電鉄京都精華大学前駅の近くにある現在の寺には本堂の前に径三メートル程の塚がある。五〇センチもない低い塚の上には実方の塔であろうか、地輪以下は寄せ集めの石造五輪塔があり、「雀塚」と記した石碑が建てられ、陶器の雀の人形が飾られていた（図版一～三）。

【図版三】 雀塚実方塔。五輪の塔であるが地輪と台座は別の物。付近の雀は陶器のフィギュア

『都名所図絵』には更に上賀茂神社の岩本・橋本二社にも言及する、

巻之六　後玄武　鴨下上皇太神宮の御社

（末社の）岩本橋本の二社は住吉和歌の二神とも、また業平実方の化現なりとも云ひ伝ふ。

と『徒然草』の話題を記している。上賀茂神社の末社に業平・実方を祀る話は現在の神社の説明板には見えないが名所案内には頻出し、『雍州府志』（註一一）に

岩本社　片岡の社と沢田の社の間にあり。けだし岩上に神籍を構ふる故にこの名あるか。橋本は二ノ鳥居の北、堀の西に在り。……神祇拾遺に曰く住吉玉津島は和歌の両神なり。業平実方常に此の社に詣り和歌の秀逸を祈る。世人二人をして両神の化現なりとす。

とある。又北村季吟『菟芸泥封』（つぎねふ）（註一二）には

橋本社　細殿の辺戌亥の石橋の傍におはする故に号橋本。神祇拾遺抄云。岩本橋本は玉津島住吉、和歌の両神也。業平実方常に件の社を拝し和歌に秀んことを祈り遂に家風なりて誉、海内にみつるの故に世人両神の化現と云々。

徒然草に「賀茂の岩本・橋本は、業平・実方なり。吉水和尚の月をめで花を眺めしいにしへの　やさしき人はここにありけるとよみ給ひしは、岩本の社と云々。橋本社は御手洗川に影のうつりたる所と云々。

ほぼ同趣旨の記事は『京師巡覧集』一四にもあり（註一三）。「岩本橋本ハ住吉和歌ノ両神ナリ。業平実方ハ常ニ拝件二社祈和歌ノ秀、遂ニ家風成テ誉溢海内。云々」

とある。

この二社は上賀茂神社、正式名は「加茂別雷神社」の二四末社の

【図版四】上賀茂神社。京都市北区上賀茂

【図版五】橋本社、上賀茂神社境内

【図版六】岩本社、同じく上賀茂神社境内

内に現存し、本殿前の橋の手前に朱色の玉垣を回す一間社流造の社が橋本神社、本殿の東、片岡社の近く、川中に張り出した大きな石の上に立つ同規模の社が岩本神社である（図版四～六）。橋本社は扁額だけであるが、岩本社には説明板があり、「祭神は底筒男神、中筒男神、表筒男神」とあるので住吉三神である。神社のパンフレット、観光案内には業平・実方の話は見えないが、『徒然草』に記載されていること、百人一首の故事解説にも紹介されているためか、ネット上には多く紹介記事がある。

『出来斉京土産』（註一三）にはまた、

出雲路道祖神

（前略）藤原実方朝臣、歌枕求むとて奥州にくだり馬にのりて社の前をとほるに、実方あなどりて下馬せざる事を、神いかりて馬は斃れ実方も死せしを社のそばにうづみしかば、実方の霊あながちに都を恋ひて化してすずめとなり、禁中の台盤所に来り水を飲み餌（えばみ）せしと。これを入内雀といふとかや。

と書いている。

出雲路道祖神は昔は鴨川の川辺にあったが現在は上京区幸上町（さいのかみちょう）にある。石鳥居と玉垣を回した鞘堂に収まった社殿があり、その向かって右奥に高さ一メートルほどのしめ縄をはった黒い石があり、その周辺にも大きな河原石が集められている。この石には「猿田大明神御神石」の標示石がある。神社の説明板には祭神が猿田彦神、相殿に天御中主命、天照大神、大国主命、天鈿女命等八柱、しばしば類焼の災いを受け規模は小さくなったが元は平安京の鬼門鎮守、源平盛衰記にも見える、とある（図版七～九）。

なお「出雲路」は出雲国に通じる道ではなく、この地が愛宕郡出雲郷であったのに因む地名である。「京の出入口」は奇妙で、丹波国と反対の地に「丹波口」の地名があったりする。

なお実方の命日は、根拠不明ながら『日次記事』に十一月十七日とされている（註一四）。

【図版七】幸神社こと出雲路道祖神社遠景。
京都市上京区幸上町

【図版八】幸神社本殿

【図版九】幸神社の猿田大明神御神石

ところで陸奥にあるという実方の墓は西行（一一一六～九〇）が『新古今和歌集　哀傷歌』（註一五）に

陸奥へまかりけるに野中に目にたつ塚の侍りけるを問はせ侍りければ　これなむ中将のつかと申す　と答へければ　中将とはいづれの人ぞ　と問ひ侍りければ　実方朝臣のこと　となむ申しけるに　冬の事にて霜枯の薄ほのぼのと見えわたりて　折ふし物悲しう覚え侍りければ

朽ちもせぬその名ばかりをととめ置きて
枯野の薄形見にぞ見る

とあり、古くから陸奥国名取郡の箕輪・笠島の地とされている。松尾芭蕉の『奥の細道』紀行では皐月の豪雨のため見学はできなかったとしている。

現在の「実方中将の墓」は宮城県名取市愛島塩手の、野中でなく山裾の、玉垣に囲まれた目に立つとも言えない小さい塚で、石柱と西行の歌碑があった。筆者はその南の名取の道祖神・佐具叡神社と、その近くの笠島廃寺は何度も訪れたが実方の墓は一度しか見た記憶が無い。

仙台藩の学者、佐久間洞巌の『奥羽観蹟聞老志』（註一六）は巻之五名取郡でこの地を詳細に紹介している。先ず「笠島道祖神」の項で

在笠島村。祭洛陽賀茂川西一條北出雲路道祖神之女也。往昔私通商賈。故所謫流死。干此州人立祠之。以元夜為祭日焉。九月十九日。令神輿之干北釜還。郷人祈神。有応則為陰相。而賽之。

……

続けて「按ズルニ」として道祖神は猿田彦神であるとの考証を述べる。

更に続いての「実方中将墓」は『神社考』、『古事談』それに西行の『山家集』も引用、此の地には実方の落馬した「停馬地」、落馬した実方を担ぎ込んだ「寓舎宅」、病気が重くなった実方が遺書を書いた「臥書地」、遺骸を安置した「肆尸地」、荼毘に付した「火葬地」があり、村名「塩手村」は実方の乗馬の馬具「しおで（鞍）」を埋めた地とする。更に道祖神の東南に「中将宮」があり、白雀と化した実方が妖怪をなしたので神号を授けてここに祀った、とある。以下実方の代表的な和歌十三首を引用、解説し

「自笠島至此。凡十四条。共記実方事実。以備便覧」としめくくる。活字版の仙台叢書で八頁に及ぶ。

みちのくの歌枕は宮城県、それも仙台市と多賀城・松島・塩竈周辺に集中しているのは国府多賀城に近いから、とされているが、「野田の玉川」のように県外にもご当地を名乗る歌枕がここにあるのは、上方文化にあこがれた仙台藩の家風、佐久間洞巌がそれを忖度して……と古代史の余談に先生方から何度か聞いた記憶がある。本書の実方絶賛などがその根拠にされたのだろうか。

実物はすでに残っておらず、何代目の子孫と称する松もないのが「陸奥の阿古屋の松」であるが、ご当地を主張しているのは出羽国村山郡、現在の山形市平清水の千歳山である。

『奥羽観蹟聞老志』は巻之一三出羽国村山郡に

阿古屋松

歌枕曰出羽也。古事談曰。実方経廻奥州之間。為見歌枕。毎日出行。或日あこやの松見むとて欲出之所国人申ていはく。あこやの松と申所此国中候はねと申せし時老翁一人進出申曰。君は出べき月の出やらぬかなと古歌を思召て被仰下候歟。然は件の所は出羽陸奥等堺之時可談話之歌也。彼堺両国之後也。件松出羽国方に罷成候也と申けり。

古歌　みちのくのあこやの松にこがくれて　いつへき月の出やらぬかな

以下阿古屋松を詠んだ和歌、実方の墓を詠んだ漢詩を載せる。本書は出羽国については簡単な記事しかないので、明治に伊勢齋助の追加した『奥羽観蹟聞老志補修編』（仙台叢書『奥羽観蹟聞老志』下巻に収録）には、この地に萬松寺があり、実方の子朝元の立てた墓と追福碑があるとしている。

この地は江戸時代末から陶器生産がおこり、現在も「平清水焼」の陶器工房が並び「梨青磁」などの民芸色ゆたかな作品を作ってい

る。何度か訪問し、当時まだ残っていた薪焚きの連房式登り窯を見学、轆轤による器物の製作法を学んだが、阿古屋松は観光パンフレットに名前が出ているのみであったと記憶する。月の出が隠される程の巨木であったらしく、「阿古屋姫と老松の精」の悲恋物語なども伝わるが、実方と直接の関係はない。

『実方集』には実方の和歌に「安達の真弓」「はばかりの関」「勿来の関」など東北の歌枕が見えるが、これらの地には実方来訪伝説はないようである。

栃木県宇都宮市に「雀宮神社」がある。御諸別尊を祭神とし「鎮めの宮」を社名の起源とするが、藤原実方の妻が奥州に向かう途次此の地で没し、奥州で死んだ実方が雀になって塚を訪れたという伝承もあると同社のホームページにある。また神奈川県横浜市戸塚区にも「実方塚」があると言う。

（註八）秋里籬島　竹村俊則校注　『都名所図絵』　角川文庫　昭和四三年
（註九）大島武好　『山州名跡志』　新修京都叢書　第一六巻　昭和五一年
（註一〇）『山城名跡巡行志』　新修京都叢書　第二二巻　昭和四四年
（註一一）黒川道祐　『雍州府志』　新修京都叢書　第一〇巻　昭和四三年
（註一二）北村季吟　『菟芸泥封』（つぎねふ）　新修京都叢書　第一二巻　昭和四七年
（註一三）『京師巡覧集』・『出来斉京土産』　新修京都叢書　第一一巻　昭和四九年
（註一四）黒川道祐　『日次記事』　新修京都叢書　第四巻　昭和五一年
（註一五）佐々木信綱校訂　『新古今和歌集』　岩波書店　昭和四八年
なおこの文は西行の『山家集』にも載せられている。
（註一六）佐久間洞巌　『奥羽観蹟聞老志』　仙台叢書　昭和三年

四．「歌人の魂」の帰京伝説

東北で最期を遂げ、伝説ではこの地に埋葬された実方は、都への帰還もその後の昇進の夢もかなわず、魂は雀になって帰京、平安京清涼殿の「台盤所」の飯を食い散らしたというのが伝説の終わりである。

小鳥の雀はスズメ目スズメ科の、ユーラシア大陸の温暖地に分布する鳥で、日本の雀は人家に近く住み着き、雑食性で稲の害虫を食べるが収穫期には実った稲を食い荒らし、鳴子や案山子で駆除され、猟鳥として食用にもされる。人なつこいが飼育は難しく、生態にも不明なことが多いと動物図鑑の類には見える（註一七）。

現代の京都でも神社の境内や公園で人の少ない時、ベンチで休んでいると鳩とともに雀が近寄ってきて餌を催促することがある（図版一〇・一一）。さすがに欧米の公園の小鳥のように人の体に止まったり手から直接餌を取ったりすることはないが、おしゃべりな町衆を「京雀」と言うようにさえずりも何か訴えるようである。

前記『出来斉京土産』には実方の化けた雀が内裏に入り込んだので「入内雀」と言うと書かれていたが、同じスズメ目スズメ科の鳥

【図版一〇】京都の雀。神泉苑にて

【図版一一】京都の雀。冬の寒風に羽毛を立てた「ふくら雀」。京都府立植物園にて

に「ニュウナイスズメ」がいる。羽の模様がスズメと少し違い、人家を離れた山林に住み、春夏に東日本で営巣・繁殖し、秋に西日本に移動して稲を食い荒らし越冬する。このスズメの名は実方伝説によるものらしく、京都市動物園のニュウナイスズメの解説にも同様に書かれていた。

政略により失脚、大宰権卒に左遷されて大宰府に卒し、怨霊は大政威徳天天満大自在天神となり豪雨と落雷で平安京を荒らし、政敵を殺し、名誉回復、天台座主による調伏と北野寺・北野神社の建立でようやく沈静させられた菅原道真に比べると穏やかであるが、菅原道真の怨霊は実は藤原氏内部の権力争い、特に藤原師輔による道真失脚の首謀者藤原時平とつながる藤原実頼の一族の追い落としに利用されていたことは角田文衛博士に解明せられたところである（註一八）。

平安宮清涼殿台盤所の穀物を食い荒らした実方スズメが現代の「京都の魔界伝説」の類の各書でも無視か小さな扱いですんでいるのは幸運であったかも知れない。本来空を飛ぶ鳥はホトトギスが「死出の田長」と呼ばれるように現世と冥界をつなぐ神秘的な存在なのであるが、鳴子や案山子で駆逐でき、害鳥よりも稲の虫を食べる益鳥ともされるスズメでは政治利用にも使えそうにない。

注意すべきは東北では「実方中将は死後スズメになって都に帰っ

た」という話はあまり大きく扱われていない事である。みちのくに死んだ歌人の魂は永遠にみちのくにとどまっていてほしい、というのが佐久間洞巌らみちのく人の願いなのだろうか。

（註一七）三上　修『スズメ　つかず・はなれず二千年』岩波科学ライブラリー　二〇一三年

（註一八）角田文衛「師輔なる人物」『平安の春』所収、講談社学術文庫　一九九九年

五．おわりに

「都とみちのく」に深く関わる人物で国文学以外にはあまり注目されていないのが藤原実方であった。大半が伝説の人であり取り上げるほどの資料もあるまいと思っていたら京都には意外と伝承が多く、その割に大きく取り上げられていないと気づいて調べてみたのが本稿である。

実方の伝承が文献に見えるのは没後数世紀を経てからで、これを「みちのく」との関係で早く注目された高橋富雄博士も、「このはなしは面白いが、まともにとるのは『おこ』なようである」（註一九）と、伝説の大半は風流の貴公子として美化された若い歌人の物語としての後世のもの、とされた。しかし実方を敬愛したその後の人々は更に伝説を付け加え、佐久間洞巌の調査した江戸時代の笠島道祖神周辺は今日の名作文学・映画・漫画の聖地めぐりのごとき様相を呈していた。それも今はまた塚と歌碑とを「形見にぞ見る」のみであるが。

「都とみちのく」の関わりを伝える物語は多いが、藤原実方については都、みちのくそれぞれの伝承がやや相違しているので改めて精査し、とりまとめた物である。

（註一九）高橋富雄『みちのくの世界』角川新書　昭和四〇年

本稿も資料探索に多くのかたがたのご助力を得た。衷心より御礼を申し上げる次第である。

（令和元年七月三一日）